

……いんふおるむ(第46回)……

アフリカ系アメリカ人とニュース・メディア

この小論は、アメリカのニュース・メディアがアフリカ系アメリカ人にどのような対応をしてきたかという点について、ジャーナリズム・クォーターリー誌およびパブリック・オピニオン・クォーターリー誌などの論文により考察した。

1 新聞メディアと人種 (ケーネル・リポート)

新聞ニュース記事における人種差別の問題を網羅的かつ組織的に調査した報告書にケーネル・リポートがある。市民の不平等に関する国家諮問委員会の報告書(1968年)で、「新聞メディアがアフリカ系アメリカ人を締め出している」と訴え「新聞は、まるでアフリカ系アメリカ人がこの世に生まれたい・結婚しない・死亡しない・PTAの集会に出席しない人のように扱っている」と批判し「アメリカの日常社会から彼らを疎外し、無視し、その結果、この国における白人・黒人の対立現象を生ぜしめた」と結論した。当時の新聞にアフリカ系アメリカ人の記事がのことはあまりなかった。1970年国勢調査の彼らの人口比率は11%を占めていたが、新聞記事の上では恰も存在していないかのようなようであった。リポートの出た68年は、キング牧師の暗殺でアフリカ系アメリカ人の暴動が全米で吹き荒れた年である。ケーネル・リポートは、このような60年代の人種対立の社会風潮を反映したものであり、ニュース・メディアの在り方が問われたものである。

「いまアメリカが直面している最も重要な問

題は何か」のギャラップ世論調査(択一式回答)によると、「人種問題」は63年が52%、65年が52%と圧倒的な主張であるが、60年代末期には「ベトナム戦争」に関心が移行し、70年代になると「大学の反乱」や「ベトナム戦争」が1位に昇り、「人種問題」は4位以下に後退している。公民権法以降に推進されたアファーマティブ・アクション(人種差別解消のための一連の政策)の効果が徐々にあらわれてきたのであろう。一方、ニュース・メディアも変わってきたようだ。

(射殺事件とニュース・メディア)

ケーネル・リポートに触発され、メディア研究は活発になった。ジャーナリズム・クォーターリー誌に載ったパランの研究(73年)は、類似する3つの大学生射殺事件についての新聞メディアの対応を人種差別的視点から取り上げている。当時、ケント大学、ジャクソン大学、サウザン大学で学生の射殺事件が発生した。ケント大学では4人の白人青年、他の2大学ではアフリカ系アメリカ人青年が被害者だった。この事件に言及した新聞記事の報道量について、事件から7日間を測定(社説を除く)した。新聞は、東部のボストン・グローブとワシントン・ポスト、全国紙のニューヨーク・タイムス、南部のシャルロット・オブザーバーとニューオーリンズ・タイムス・ピキューン、中西部のディモインズ・レジスターの計6紙を選定した。調査の目的は、白人の事件ニュースの方が報道量が多いという従来の批判を検証することにあつた。6紙別にケント大学(白人被

害)対ジャクソン大学、ケント大学対サウザン大学の比較をした。12の比較表のうち統計的な有意差があったのは僅か4表であり、2表はケント大学事件の報道量が多いのに対し、残り2表はサウザン大学事件(アフリカ系アメリカ人の被害者)の方が多く、人種による報道量の差は見られなかった。これは、ニュース・メディアの報道態度の変化を示唆するものである。

2 写真雑誌メディアと人種 (60年と70年の比較)

新聞メディアから雑誌メディアに目を転じよう。ニュース報道を主とするライフやタイムなどのニュース写真雑誌(週刊誌)の編集はどうであろうか。60年と70年の初めの10週間について、人種別報道量の比較をしたシュテムペルの研究(ジャーナリズム・クォーターリー 71年)がある。雑誌はライフ、タイム、ニュースウィーク、USニュース及びルック(隔週刊)の5誌で、アジア系アメリカ人などのマイノリティや判別不能の人種は除外した。

アフリカ系アメリカ人の報道量は、5誌ともに60年よりも有意差のある増加をした。70年の報道量は、ほぼ8分の1であり、当時の人口比率に近い数値となっている。このことは、新聞メディアの変革が雑誌メディアにも及んだことを示唆している。

(50年間の時系列比較)

雑誌メディアにおけるアフリカ系アメリカ人の写真記事の報道量を1937年から88年まで5年おきに時系列分析した研究がジャーナリズム・クォーターリー(90年)に載っている。セントラル・フロリダ大学コミュニケーション学教授のレスターとスミスの2人である。ライフ、ニュースウィーク、タイムの3誌について、

37年、42年、47年、52年、57年、62年、67年、72年、78年、83年、88年の全雑誌を対象とし、人物写真のある記事の総ページのうち、アフリカ系アメリカ人の写真記事の割合を計算し3誌別に時系列比較をした。調査年の雑誌を全部計算することで、特定事件や特集号の影響を最小限にとどめた。なお、人物写真があれば、広告も集計の対象とした。約16万ページのうち、約3万4千ページに人物写真があった。その34%にあたる1,150ページはアフリカ系アメリカ人の写真記事である。この比率が年とともに増えるだろうという仮説であったが、3誌ともその傾向が認められた。例えば、42年の3誌平均は1.1%であるが、88年では8.8%に伸びた。

人物写真の記事についての内容分析(コンテンツ・アナリシス)も試みている。分類の項目は表紙、日常生活、有名人、時事解説、広告、娯楽、スポーツ、犯罪の8種類としたが、50年の期間を3つの時代にまとめることにより、変化の手がかりを求めている。第1期は37~52年で、人種差別が社会の風潮であった時期である。当時プロ野球のメジャー・リーグでアフリカ系アメリカ人選手は1人もいない。第2期は57~72年で、公民権法の施行で騒動が激化した時期である。マス・メディアは彼らの不穏の心の底に潜む原因が何であるかを注意深く取材する態度が増えた。第3期は78~88年で、みな同じ平等なアメリカ人なのだという自覚が高まった時期である。83年にはキング牧師の誕生日を国の祝日とする法案が成立した。

全期を通じ増加した項目は「有名人」「犯罪」、減少項目は「娯楽」である。2・3期に限っての変化は、「日常生活」と「広告」の増加、「時事解説」の急減傾向である。総合すると、社会に抗議する人、エンターテインメントの対象

としてのアフリカ系アメリカ人を報道するよりも、日常生活の同輩として報道するようになったと言える。50年間で、マス・メディアは改善されたようだ。

3 雑誌メディアに描写される貧困層

貧困の問題をニュース雑誌が取り上げる際、貧困者を代表する者として、アフリカ系アメリカ人を実際以上に過大視して報道する傾向があるようだ。この問題の研究者はギレン（パブリック・オピニオン・クォーターリー・96年）である。

（ギレンの研究）

ギレンは、88年～92年のタイム、ニュースウィーク、USニュース・アンド・ワールド・レポートの3誌の記事から、貧困や福祉の記述を探し、その中の人物写真中に占めるアフリカ系アメリカ人の割合を数えた。182の記事に206の人物写真があり、そこに506人（人種不明を除く）が写っており、その62%がアフリカ系アメリカ人である。アメリカの代表的なこれらのニュース雑誌を読む人は、貧困層の大半がアフリカ系アメリカ人であるとの印象を持ってしまっただろう。だが、1990年国勢調査による貧困層に占める比率は29%に過ぎず、雑誌メディアの編集者は、実際の倍にあたる虚像を流し続けている。

ギレンは、貧困の掲載記事の人物写真について、労働年齢（18～64歳）に該当すると思われる351人を拾い出し、人物が就労者・非就労者のどちらの状態であるかを判別した。アフリカ系アメリカ人は、就労者1割、非就労者9割の状態で描写されていた。国勢調査の貧困者のうち、労働年齢に該当するアフリカ系アメリカ人を10割とすると、就労者は4割、非就労者は6割である。従って、雑誌メディアの

編集者は、4割いる筈の就労者を1割にカットして描いていたことになる。アメリカ人は、一般に、労働している貧困者には同情的で、ディザーピング（援助に値する）の貧困者と位置づける。一方、労働年齢であるのに働かぬ貧困者を、怠け者、無能者、酔っ払いなどの援助に値しない貧困者と決めつける傾向がある。雑誌メディアの読者は、貧困者の大半がアフリカ系アメリカ人であって、就労可能とみなされる労働年齢該当者の殆ど全部が働くことをしない非就労者であり、施しに依存しているとの認識を持ってしまう。

当時行われた世論調査をみると、一般国民も雑誌メディア編集者と変わらぬ認識であったようだ。91年にカリフォルニア大学が全米電話調査（2223サンプル、65%回収）をした結果では、「貧困者全部のうち、何%がアフリカ系アメリカ人と思うか」の問にたいし、回答の中央値は50%であり、国勢調査の数字（29%）を大幅に上回っている。また、94年にCBSとニューヨーク・タイムスが共同で行った全米電話調査によると、「貧困層の多くが、アフリカ系アメリカ人であると思うか、それとも白人であると思うか」の問にたいし、「アフリカ系アメリカ人」55%にたいし、「白人」は24%にとどまっている。

さて、ギレンの研究は、当時メディア専門家に強い関心を与え、論議の的となった。その後のメディアが何等かの変化をしたかも知れないのである。この点に着目し、追試をしたのがクローソン（プールデュ大学）とトリチェ（インディアナ大学）である。

（追試の研究）

この研究は、93年から98年の6年間について、ビジネス・ウィーク、ニュースウィーク、ニューヨーク・タイムス・マガジン、タイム、

USニュース・アンド・ワールド・レポートの5誌を調査した。貧困や福祉に関する記事(74)中の人物写真(149)に写っている人々(357人)の人種を判別した。人種は白人、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニック、アジア系アメリカ人の4種とし、96年の人口動態統計(国勢調査局)と比較した。論文はパブリック・オピニオン・クォーターリー(2000年)に掲載されたが、ニュース雑誌メディアの編集態度は依然として変わっていないと報告している。

アメリカでは一定の収入に達しない人を貧困者と定義している。その貧困者に占める人種は、96年の人口動態統計で、白人45%、アフリカ系アメリカ人27%、ヒスパニック24%、アジア系アメリカ人4%である。ニュース雑誌5誌の貧困者の記事に掲載された人物写真の人種は、白人は33%で人口統計より12ポイント低いのにたいし、アフリカ系アメリカ人は49%で、人口統計よりも22ポイント多い。ヒスパニックは19%で5ポイント、アジア系アメリカ人は0%で4ポイント低い。過大に誇張されたのはアフリカ系アメリカ人だけで、白人もヒスパニックもアジア系アメリカ人も皆過小に報道されている。

記事の人物写真のうち、母親とその子どもが写っている写真について、家族数もしらべた。アメリカでは、一定の収入以下で、一定の扶養児童のいる母親に福祉手当(AFDC)が支給される。記事中の成人のうち、福祉(AFDC)の対象となると思われる人を100とすると、そのうち52%がアフリカ系アメリカ人であった。一方、国の統計によると、AFDC受給者に占めるアフリカ系アメリカ人は37%であって、実際を15ポイント上回る。

当時「福祉受給者の子沢山」という悪口がAFDC受給者に陰口をされた。子どもが多いほど暮らしが楽になるという意味である。記

事の人物写真について、子ども、成人、高齢者の3つに大別する作業をしたが、子ども(18歳以下)は53%を占めている。96年人口統計における貧困者の年齢分布によると40%であって13ポイントの誇張がみられる。

また、写真の背景によって居住地が都会であるかを判別する作業をしたところ、96%が都会地域であった。人口動態統計では貧困者の77%が都市居住であり、雑誌記事には誇張があるようだ。

このように88年以降のニュース雑誌では、貧困や福祉の記事に添えられた人物写真には、人種の統計分布をずっと上回るアフリカ系アメリカ人が登場している。結果として、貧困者の否定的な面をアフリカ系アメリカ人が持つというマイナス・イメージを読者に与えることになっている。

ニュース雑誌メディアの偏向の原因として、雑誌社が大都市に集中しているという説がある。写真を求められたカメラマンが、手近かな所での取材をするため、比較的大都市に多いアフリカ系アメリカ人のスラム街に行くという論法だ。しかし、93年人口動態統計によると、10大都市のうち、メトロポリタン地域に住む貧困者の32%がアフリカ系アメリカ人に過ぎない。

やはり、原因は編集者の側にあるのではなからうか。ギレンはニュース雑誌3誌の写真編集グループに面接し「貧困者のうち何%がアフリカ系アメリカ人だと思うか」の質問をした(93年)。前述したが、91年に全米の電話調査をしたときは50%であった。知的エリートのは回答は、平均値42%であり、幾分実勢に近付いたとはいえ、本当の数値29%をまだまだ上回っている。ニュース雑誌の編集担当者の誤った認識が国民の判断に影響を与えたかもしれない。或いは、国民の世論をキャッチ

している編集者が、その認識についているのかも知れない。

いずれにしても、これらの誤った認識は行政の政策に影響を与えるかも知れない。アメリカ系アメリカ人についての白人側の固定的偏見が福祉の支持を減らしていることとも考えられる。

(了) 橋本 寛

(参考文献)

Rosalee A ,Clawson and Rakuya Trice .
2000 “Poverty as we know it” Public
Opinion Quarterly 64 : 53 ~ 64
Martin Gilens .1996 .“ Race and Poverty
in America ” Public Opinion Quarterly

60 : 515 ~ 541

Paul Lester and Ron Smith .1990 .
“ African - American Photo Coverage
in Life ,Newsweek and Time ,1937
~ 1988 .” Journalism Quarterly 67 :
128 - 36

Baran S .1973 .“ Dying Black / Dying
White : Coverage of Six Newspaper ”
Journalism Quarterly 50 : 761 ~ 63

Stempel ,G .1971 .“ Visibility of Blacks
in News and News - Picture Magazines ”
Journalism Quarterly 48 : 337 ~ 39

アンドリュー・ハッカー、上坂昇訳 1997、
“ アメリカの二つの国民 ” 明石書房